『みねさんの　あぁ、そうなんだ塾』　【第４０回】

今回は「召命」について書こうと思います。

4 月 17 日金曜日、わたしにとって大切な方が帰天されました。信者の方はもちろんのこと、町内のみなさんからも「Gen ちゃん」と慕われていらっしゃいました。体調を崩されているという話を聞いて、「お見舞いに行かなくては …」と思いながらも、忙しさにかまけて機会をつくれませんでした。ほんとうに後悔しています。大切な方々ときちっとしたお別れができなかったのは、もう何度目でしょう …。自分の行動力のなさがほんとうに情けないです。

わたしは〇〇さんの通夜の日帰宅してから、これまでの感謝の意をあらわすために手紙を書きました。翌日の告別式で、マリア様の〈不思議のメダイ〉と一緒に棺に納めさせていただきました。きょうはそれを読んでいただいてから、神さまが私たちにお与えになってくださっている〈召命〉について、お話ししようと思います。（手紙の内容の一部を加筆・訂正いたしました。）

洗礼者ヨハネ　　〇〇　Gen〇 様

〇〇さん、きょうまで本当にありがとうございました。お世話になりました。

作家・戯曲家の井上ひさしさんは、「宗教は〈人〉である」と書いています。ひとは、ある宗教の教義を徹底的に勉強して、その教えを受け入れて信仰生活に入るのではないのです。その教えを人生で実践している〈ひと〉に出会うことによって、私たちは信仰への〈飛躍〉を遂げるのです。〇〇さんはそのことを私に教えてくださいました。

〇〇さんと出会ったのは、町会内の法事の時でしたね。葬儀が終了し、お清め（わたしはこの言葉がきらいです。「清める」とは「穢れを除くこと」。亡くなった方に接すると穢れるのでしょうか？　冗談じゃありません。）の席で初めて隣の席に偶然座ったのは、いつのことだったでしょう。〇〇さんがクリスチャンであり、とても愉快でやさしい方だということを知りました。その後、何回か法事があり、私はほかにあまり親しい方がいなかったので、「〇〇さんの隣に座って、いろいろな話を聞きたい」と思い、いつも意識的にあとをついて行きました。そのたびに、いろいろな話をうかがいましたね。

お若い頃からお母さんのお世話、今の言葉で言えば「介護」をなさっていたこと。たしか、20 代からだったと記憶しています。青春時代の時間の多くを、お母様にささげることは誰にでもできることではありません。「自分の時間を目の前にいるひとに捧げること」 ― それは「他者をたいせつにする＝愛する」ことだと、ある本に書いてありました。〇〇さんのやさしさは、その経験から紡ぎだされたものだと思います。

奥様がクリスチャンであり、お二人のお嬢さまたちも洗礼を受け、「お父さんも受洗しなさいよ」と勧められて、「いやだよ」と言い続けたんですよね。日曜日になると、奥様とお嬢さまたちは教会へ。「オレはうちで焼酎、飲んでたんさ」って、おっしゃっていましたね。「オレは洗礼を受けようなんて、チットも思ってなかったけど、神父さまが「〇〇さん、公教要理（こうきょうようり）（㊟①）のベンキョウね！」って言うんで、しょうがねェ行ったんサ。そのあと、飲み屋に行って飲んでたんサ」―。

このお話は一緒に飲む機会があるたびに話されたので、「何度目かなぁ …」と思ったりしました。

でも私は何度聞いても、初めて聞いたように「あぁ、そうですか」って応えていたのを覚えていますか？　ふつうなら「また同じ話か …」と、右の耳から左の耳に聞き流すのでしょうが、私にとってはその話の背後に、「私たちと教会に行ってほしい」、「洗礼を受けてほしい」というご家族の願いを聞き入れたいのだけれど、なんとなく意固地になっている自分を感じていた〇〇さんを想像していました。ひとりで寂しかったんですよね、きっと。そうでしょう？

また、「ベンキョウね！」と言う神父さまのことばに、「しょうがねェなぁ …」とは思いながらも、奥様やお嬢さまたちと「いっしょに教会へ行きたいなァ …」という気持ちがきっとあったのではないでしょうか。それが実現したのは、神さまのお導きと、奥様とお嬢さまたちの祈りが〇〇さんの頑ななこころを溶かしたからでしょうね。

こんなこともありましたね。隣組の方の葬儀後、その方の家で「十三仏(注②)」を一緒に唱えたことがありました。何日か後、「告解(こっかい)(注③)でゆるしてもらった」というお話をきいて、クリスチャンがほかの宗教の儀式である「十三仏」をすることは、〈罪〉の一つにあたることを初めて知りました。それを承知で引き受けた〇〇さん。「人の思いに寄りそって物事を考え、行動できる人」―そんな人間になりたいと思いました。

私には、人生における〈最大の飛躍＝洗礼〉を決断させてくださった〈人たち〉がいます。遠藤周作氏、杉山　好(よしむ)先生、聖コルベ、渡良瀬養護学校時代の教え子D君（彼は重度知的ハンディキャップがある高校生でした)。そして ― 〇〇さん、あなたです。

「宗教は人である」ということは、真実だと思います。どんな立派な説教を聞くより、どんな感銘する本に出合うより、目の前にいるひとの〈人生・生き方〉を目の当たりにして、こころが動かされる経験こそ、ひとを最終的に信仰に導くものだと確信します。私にとって〇〇さんは、「その人」でした。信仰への扉の前で、「入ろうか、入るまいか …」と迷っていたわたしの背中を「ポン！」とやさしく押してくださいました。

〇〇さん、いつも「お父さん」を支え、励まし、大切にしてくれた奥様とお嬢さまたちに囲まれ、ほんとうに「仕合わせ」な人生でしたね。そして、私たちをいつもあたたかく、やさしい眼差しで包みこみ、大人からこどもまで「Genちゃん」と呼ばれていた〇〇さん、ありがとうございました。「代夫(だいふ)(注④)」をしていただいたお礼も十分にできず、心残りです。桐生教会のホームページで『みねさんの　あぁ、そうなんだ塾』というコラムを書かせていただいています。それを、せめてもの「恩返し」とさせてください。どうぞ神さまの国で読んでください。

私は、うらやましいことがひとつあります。これからイエス様とお会いになるのでしょう？　「大酒のみ」と言われたイエス様と、杯を交わすのでしょう？　いいなぁ！　もしかして、マリア様から「お酌」されるのでは!?　いつか私もお仲間に入れるよう、お取次ぎください！　（くれぐれも、飲み過ぎにご注意を！）　また、お会いしましょう！

天のお父様、どうぞ洗礼者ヨハネ・〇〇 Gen〇さんに永遠の安らぎを与え、あなたの光の中で憩わせてください。父と子と聖霊の御名によって。 アーメン。

2015.04.20.　マクシミリアン・コルベ

……

【㊟①】**公教要理**：キリスト教の信仰を伝える教理入門教育のこと。カテキズムともいう。
【㊟②】**十三仏**：年忌（命日、法要）に際し、初七日から三十三回忌までの 13 回に配当して供養する仏・菩薩。「不動明王・釈迦如来・文殊菩薩・普賢菩薩・地蔵菩薩・弥勒菩薩・薬師如来・観世音菩薩・勢至菩薩・阿弥陀如来・阿閦如来・大日如来・虚空蔵菩薩」を指す。「ふ～どう、しゃ～か、も～んじゅ、ふ～げん、…」とメロディーに乗せて歌う。
【㊟③】**告解**：罪を犯した信者が、心から悔い改めて、権限を与えられたキリストの代理者(司教・司祭)に罪を告白し、ゆるしを受けて、その後に命じられた償いを果たすこと。
【㊟④】**代父**：キリスト教入信式の際に、教会共同体を代表して受洗者の世話にあたる人。洗礼を受けようとする者の生活や信仰について教会に証言する証人でもあり、また受洗者の信仰生活にとっての案内役でもある。

✢ 私たちに与えられた「召命」とは

16 世紀の「宗教改革」でこの人の名前をご存知でしょうが、マルティン・ルター (Martin Luther 1483～1546)は、「召命」という概念を聖職者や修道者に限定せず、一人ひとりが神からの使命を受けていること、世俗の只中で従事する職業も神から受けた使命であることを強調しました。ドイツ語の「職業　Beruf(ベルーフ)」は、「berufen(ベルーフェン)」つまり、「それへと呼ばれること」が本来の意味であることを、杉山 好 先生からお聞きしたことがあります。

神さまは私たち一人ひとりに〈召命〉をお与えになっています。私たちは、神さまに「呼び出されて」います。神さまの存在を証しするために、その人にできることをするよう望まれています。私たちが、ある「仕事をする」 ― ということは、それを通して「神さまから与えられた使命を果たしている」ということになります。すでに書きましたが、わたしは「医者」になるのが夢でした。しかし、その〈わたしの夢〉は叶えられず「教員」としての人生を歩みました。その中で、たくさんの素晴らしい出会いを経験しました。神さまはその経験を通して、わたしに「人生」を教えてくださったのだと思います。若い頃は「自分が教員という仕事を選んだ」と思っていましたが、今は「もっと大きな力、〈見えない手〉が導いてくれた」 ― と確信しています。

✢ Gen さんに与えられた「召命」

Gen さんは、和服や帯などの織物の図案を描くお仕事をされていました。同時に、教会ではいろいろな委員会の委員、そして教会委員長もなされました。「信者総会」のパンフレットの表紙を Gen さんの絵で飾ってくださいました。視力や身体にハンディキャップがある方が、教会関係の旅行に出かけるときに同行なさって、身の回りの世話や入浴時の手伝いなど、その方たちの手足となってくださいました。

さらに神さまは、Gen さんだからこその「絵筆による宣教」という召命もお与えになりました。絵の才能を生かしてイエス様やマリア様の絵をお描きになり、多くの方たちに贈っていらっしゃいました。我が家にも「GEN」のサインが入ったイエス様とマリア様の絵が飾られています。

神さまは Gen さんに、たくさんの仕事をお与えになりました。Gen さんはその一つひとつを、真心をもって取り組んでいらしたと思います。出会ったすべての人たちによろこんでもらうために。みんなが仕合わせになるために。そして、口には出さなかったけれど、私たちに「神さまはいるんだよ」と、その人生で伝えるために。Gen さんのまわりには、いつもたくさんの笑顔があったことがそれを証ししています。Gen さんの人生は、まさに「福音宣教」そのものでした。

✢〈終わり〉は〈始まり〉

親しい方が天に召される ― とても悲しく、つらいことです。でも、クリスチャンである私たちは同時に、そこに何事にも代えがたい「希望」を見出します。

人間にとってこの世での「死」は、〈終わり〉ではないからです。それは〈終わり〉であるとともに、〈始まり〉でもあるからです。Gen さんへの手紙に、『「大酒のみ」と言われたイエス様と、杯を交わすのでしょう？　いいなぁ！　もしかして、マリア様から「お酌」されるのでは!?』などということを書けるのも、「希望」があるからです。

なぜ「死」が〈終わり〉であり、〈始まり〉であるのか。それを理解するためには、〈イエスの死と復活〉が示す意味を知ることが必要です。森 一弘師は、『キリストの十字架と復活は、キリスト教の信仰の中心です』と書いておられます。

次回から、「イエスの死と復活」について書いていこうと思います。

【引用・参考にした書籍】

・『岩波　キリスト教辞典』　・『大辞泉』　・森 一弘『キリスト教入門　Q&A』